

## 富山大学附属図書館 図書館情報グループ 主幹 栗林裕子



ヘルン文庫内(中央図書館5F)

## ●小泉八雲年譜●

## ギリシャ時代(誕生～2歳)

1850(嘉永3)～1852(嘉永5)

1850年6月、ギリシャのイオニア海に浮かぶ小島シファカ島で、英国占領軍軍医の父チャールズ・ブッシュ・ハーンと、現地の旧家出身の母ローザ・カシマチの2人目の息子として誕生。

## アイランド時代(2歳～13歳)

1852(嘉永5)～1863(文久3)

母ローザとともにギリシャのイオニア海に浮かぶ小島シファカ島で、母は環境に馴染めないまま2年ほどで離婚・帰国。間もなく父も再婚し、新妻を伴ってインドへ赴任したため、残された八雲は叔母サラ・ブレナンのもとで厳格なカトリック教育を受けた。

## イギリス時代(13歳～19歳)

1863(文久3)～1869(明治2)

叔母とともにイギリスに転居、ダラム郊外の神学校セント・カスパー・スクールに入学。この頃、遊びの最中の怪我がもとで左眼を失明。八雲の写真がすべて横向きで伏目なのはこのためである。少年期に一時フランスでも学んだというが、詳細は不明。1867年、叔母の破産により、退学。19歳の時、半ば追い出されるようにリバプールからニューヨークへ向かう移民船に乗った。

## アメリカ シンシナティ時代(19歳～27歳)

1869(明治2)～1877(明治10)

オハイオ州シンシナティで印刷屋ヘンリー・ワトキンと出会い、仕事を手伝うかわら図書館へ通う日々を送った。やがて地方紙「エンクワイアラー」社の正社員に採用される。

## ニューオーリンズ時代(27歳～37歳)

1877(明治10)～1887(明治20)

ヨーロッパ系と非ヨーロッパ系の文化が入り混じるクレオール文化に魅了された八雲は、アイテム社に就職して次第に力を認められるようになった。1882年、『タイムズ・デモクラット』社に移った。1884年に開催された万国産業綿花博覧会取材した八雲は、日本館の展示に強い関心を抱いた。

## マルティニーク時代(37歳～39歳)

1887(明治20)～1889(明治22)

民族音楽の宝庫である西インド諸島への憧れから、退職してマルティニークのサンピエールに滞在。1889年西インドの二年間に結実した。

## ニューヨーク時代(39歳～40歳)

1889(明治22)～1890(明治23)

この時期、アメリカ国内での知名度が急上昇するとともに、文筆家への試行錯誤を重ねた時期だったと考えられる。また、ローエルの『極東の魂』を読んで感動し、最大限の賛辞とともに日本への思いを強めた時期でもあった。

## 横浜到着

1890(明治23)

ニューヨークの出版社ハーバー社の通信員として横浜に到着。ほどなくハーバー社の不満が高じて契約を破棄。ニューオーリンズの博覧会で知り合った文部省の服部一三と帝国大学教授B. H. チャンバレンの助力で、島根県尋常中学校教師の職を得た。

## 松江時代(40歳～41歳)

1890.8(明治23)～1891.11(明治24)

初めて得た教職で天性の資質を発揮し、「へるん先生」と呼ばれた。近代文明に未だ侵されていない松江と神々の国出雲に魅了され、来日後初の著作『知られざる日本の面影』に結実する。松江では、かけがえのない伴侶小泉セン(節子)を得た。しかし、松江の寒さに耐えかね、ふたたびチェンバレンの増援で熊本へ移った。

## 熊本時代(41歳～44歳)

1891.11(明治24)～1894.10(明治27)

教鞭を執った第五高等学校では、比較的自由的な授業を行うことができた一方、同僚との確執に悩まされた。私生活では、1893年に長男が誕生した。

## 神戸時代(44歳～46歳)

1894.10(明治27)～1896.10(明治29)

英字新聞の神戸クロニクル社に記者の職を得て、神戸へ移った。1896年、複雑な手続きが完了して正式に帰化し、日本人小泉八雲が誕生。同年、東京帝国大学の講師に招聘され、一家は東京へ移転することとなった。

## 東京時代(46歳～54歳)

1896.10(明治29)～1904.9(明治37)

東京帝国大学での講義は、小さなメモ以外は何も使用せず、美しい字で用字と語る独特のスタイルで、学生から高い支持を受けた。文筆活動も盛んで、『仏の煙の落穂』『異国情趣と印刷』『霊の日本』『怪談』『怪談』などを次々に出版。1903年、東京帝国大学から突然の解雇通知を受け取り、怒りのうちに退職。その後、早稲田大学の招聘を受け、1904年3月より出講した。同年9月26日の夕食後に心臓発作を起こし、「ママさん、先日の病氣、また参りました。」と節子夫人に訴え、間もなく息を引き取った。同月、大作『日本：一つの解明』が出版された。

## ●ヘルン文庫とは●

「耳なし芳一」「雪女」などの怪談で知られるラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904: 日本に帰化して小泉八雲)の旧蔵書で、洋書2069冊、和漢書364冊及び『日本：一つの解明』『神国日本』とも呼ばれる)の手書き原稿上下2冊約1,200枚からなるコレクションです。「知の東西融合」を目指す富山大学の 象徴的な存在として受け継がれ、附属図書館(中央図書館)において保存・公開されています。

## ●ヘルン文庫がなぜ富山県に●

「ヘルン文庫」の呼称は、八雲が最初に英語教師として赴任した松江中学校(島根県)で「ヘルン先生」と呼ばれ、妻のセツさんからも「ヘルンさん」と呼ばれていたことに由来します。小泉八雲は、生涯に一度も富山を訪れたことはありませんでした。それではなぜ富山大学に「ヘルン文庫」があるのでしょうか?

1904(明治37)年に八雲が亡くなってからも、蔵書は小泉家に置かれていました。しかし、1923(大正12)年9月に起きた関東大震災で貴重な文献が多数焼失したことから、小泉家では安全に保管できる大学へ一括譲渡したいと考えようになりました。

ちょうどその頃、富山では、のちに初代校長となる南日恒太郎氏を中心に、富山大学の前身校のひとつである旧制富山高等学校の設立準備が進められていました。南日氏は実弟でハーンの教え子である田部隆次氏から小泉家の意向を聞き、すぐに譲渡の申し入れをしました。新学校に優秀な教師を集め、当地の文化の中心とするに相応しい蔵書でないと判断したのです。同時に、旧制富山高等学校の創設に私財を投じた馬場はる正に寄付を仰いで、蔵書の購入が実現した。1924(大正13年)開校記念に馬場家から寄贈され、現在「ヘルン文庫」は富山大学に受け継がれています。

## ●ヘルン文庫の内容と特徴●

ヘルン文庫の蔵書から...



「Japan: an Attempt at Interpretation」(日本：一つの解明) 著者：ラフカディオ・ハーン

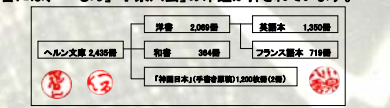
本書は八雲の代表作の一つで、日本文化の理解を目的とした著作である。八雲は、日本文化の奥行きを捉え、西洋人の視点から日本を捉えようとした。本書は、八雲の日本観を伝える重要な文献として、ヘルン文庫に収められている。

ヘルン文庫の蔵書は、八雲の知識そのものであり、彼の文章活動や講義に、直接または間接的に影響を与えた資料群です。

19歳でアイランドからアメリカに渡り窮乏の生活を余儀なくされた八雲は、図書館へ通い独学で知識を広げました。そして生活に少し余裕ができたニューオーリンズ時代(アメリカ生活の後半約10年)には、毎日2時間かけて古書店を巡り、収入の大半を本に費やしたといわれています。この時代の蔵書は約500冊あり、「Lafcadio Hearn」のゴム印が押されています。

八雲はその後40歳で来日し、54歳で亡くなるまでの間に、約1,500冊にのぼる本を入手しています。日本時代で収集した蔵書には、「へるん」「小泉八雲」の印が押されています。

ヘルン文庫の蔵書は、八雲の知識そのものであり、彼の文章活動や講義に、直接または間接的に影響を与えた資料群です。



蔵書のジャンルは、欧米の文学作品、神話・民間伝承、歴史・哲学・宗教、東洋関係、言語・辞典、自然科学等、多岐にわたります。このなかで日本関係の本は、チェンバレンの英訳による『古事記』『日本口語便覧』『日本語小文法』『日本事物誌』、ディキンズ英訳による『忠臣蔵』、パチエラーの『アイヌ研究』、能登半島を紀行したローエルの『極東の魂』などがあり、日本人の作品では、末松謙澄の英訳『源氏物語』、岡倉天心の『東洋の理想』、や、著者新渡戸稲造が八雲への献辞を付けて贈った『武士道』などがあります。

## ●八雲の作品●

八雲と津波

Tsunami(津波)という言葉を、1897年に八雲の作品『生神(A Living God)』『仏の煙の落穂(Glowings in Buddha's Field)』所収によって初めて世界に紹介された。1894年に起きた安政南海地震の際に、生霊の領域に入り、多くの村人が被害に遭い、津波から助かったと書かれた津波の物語です。津波は、津波から助かったと書かれた津波の物語です。津波は、津波から助かったと書かれた津波の物語です。

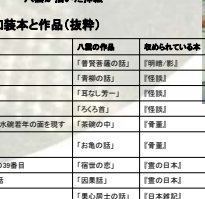


八雲が描いた津波

## ヘルン文庫の和装本と作品(抜粋)

題名	巻名など	八雲の作品	収められている本
十訓抄	巻上(上) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
玉すだれ	巻下(下) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻上(上) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻下(下) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻上(上) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻下(下) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻上(上) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻下(下) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻上(上) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』
徒然草	巻下(下) 不可解人集	『書評書評の語』	『明神・神』

八雲が描いた津波



八雲が描いた津波



ヘルン文庫内(中央図書館 毎年4月)



ヘルン文庫蔵:小泉八雲とその蔵書展(千代田区立図書館 2008)

小泉八雲展(神奈川県近代文学館 2010)

## ●活動状況●

## ○ヘルン文庫の公開○

・ヘルン文庫は、平成19年4月より、毎月第2・第3・第4水曜日13時～16時に、市民ボランティアによる定期公開をスタート。  
・見学希望者(団体・グループ)のツアー実施。

## ○企画展示会・イベント○

・附属図書館独自の企画展示会の開催。  
・学外の図書館や文学館主催の展示会への協力。  
・八雲の著作を楽しみ、ヘルン文庫を調査・研究する富山八雲会との共催イベントの開催。

## ○研究者への協力○

・ヘルン文庫の蔵書のほかに、毎年出版される八雲関係図書、雑誌等を継続的に購入して、研究者のための情報センターとしての役割を担う。  
・ヘルン文庫の蔵書目録やデジタル化した資料をWebで閲覧可能に。

## ○さらに...○

・富山県が平成24年夏に開館予定の「高志の国文学館」に、ヘルン文庫コーナーが設けられる。  
・全国の八雲関係団体との情報交換やイベントへの参加。  
・富山大学はこれらの活動に関わり、積極的に地域の文化活動に貢献しています。

	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
見学者数	522	678	810	839	1167



へるんさんの愛した日本の心 黒田蘭堂・中央図書館 2010



松江サミット参加 2010



学生や市民の見学会

## 連絡先